

# 伊那谷地名研究会通信

第 100 号

発行日 令和五年八月三〇日  
発行 伊那谷地名研究会  
事務所 〒三九九一-二一〇二  
長野県下伊那郡下條村陽阜七二〇八

## 伊那谷地名研究会

### 『通信 100 号発行』に寄せて

伊那谷地名研究会 会長 原 董

伊那谷地名研究会の発足は平成一三年一月です。それ以来、日本地名研究所並びに、広範な地名研究団体、行政機関、地域研究団体、何よりも会員の活動連携への基礎資料として「通信」を発行、会発足より二三年の活動内容を広く拡充し纏めて来ました。

今回の「通信 100 号発行」に寄せまして、これまでの「通信」に掲載してきませんでした、「研究会設立趣意書」を次に記し、今後の活動に備えていただきたいです。

#### 伊那谷地名研究会設立趣意書

地名は、人と土地の関わりによって生まれ、人々の共通の思いを土地に与えた言葉であり、土地と人々との心の通い路でもあります。そして、地域の自然・歴史・民族・文化を今に伝えてくれます。

私たちの祖先は、遠い昔から伊那谷を切り拓き、土地を耕し生活をいとなみ、共に地域社会を築いて来ました。伊那谷の地名は、そうした人々の中から発生し、今も使われている先祖と私たちの心をつなぐ貴重な文化遺産なのです。

しかし昨今、地名が忘れられ、地名に寄せる人々の感覚も希薄になりつつあります。そこで私たちは、地名研究の重要性を認識する「伊那谷地名研究会」を設立する者であります。この会は、地名を見つめ直し、地域を正しく理解することを目的とします。そして、諸先輩の業績を継承しつつ、地名を正しく後世に伝え、地域を学ぶ後継者を育成することを目指します。 平成一三年一月二三日 伊那谷地名研究会 発起人会

以上であります。これまでの活動に学んで来た趣意書ではありますが、時間の経過時代の変遷とともに忘れられがちなことは言うまでもありません。

令和の時代、地域を繋ぐ「地名を地域の基礎資料」として伝える活動を目指したいです。写真 信仰の山飯田の「権現山」（風越山）を築く山並みと天龍川に広がる山麓の町並



## 柳田民俗学と地名研究

「矢立」と「耳取」を例に

今後の課題を探る―

日本地名研究所『地名と風土』編集長

小田 富英氏



### 一、はじめに

柳田民俗学にとつて、地名研究は大きな柱であることは間違いないのですが、なかなか評価と検証が難しいのが現実です。

一方で、わが国の文化系学問の危機が叫ばれて久しいという現状があります。私は、この現実と現状を突破するには、地名研究の裾野を拡大することが有効な方法のひとつと思っています。

柳田国男の地名研究の原点は、一高時代に遡ります。休みの度に帰っていた、長兄鼎の住む布佐の隣村、湖北村（現 我孫子市）にある中峠という小さな峠をどうして「ナカビヨウ」と呼ぶのか疑問を抱きました。いろいろな人に聞いても納得いく答えはなかったのでしょうか。「遺憾とした」と後に述べています。私も子供の時に住んでいた町が山谷と呼ばれ、武蔵野台地の平坦な土地に上山谷、中山谷、下山谷まであって疑問に思っていました。柳田研究を始めて、柳田も世田谷喜多見、田山花

袋も新宿代々木、宮本常一も府中新宿のそれぞれの山谷に住んでいて、この地名が武蔵野台地の雑木林に由来している普通名詞のような地名であると知って、地名の奥深さに魅入ったものです。

この辺りの個々の体験の掘り起こしが、裾野拡大になると確信しているところです。

### 二、三分類のなかの地名の位置

峠の名前やアイヌ語地名に着目し、ひとつひとつの地名考証を積み上げていった時期を第一期とすると、柳田民俗学創設の昭和初期から二〇年までが第二期となります。

民間伝承の学として成立させるために柳田が腐心したものに「民俗資料の三分類」がありますが、地名はどこに位置づけられていたのかを、私たちは意識する必要があります。それも、昭和一〇年の『郷土生活の研究法』の完成型でなく、そこまでの試行錯誤が重要と考えています。そのヒントが、昭和六年一月一六日の東京大学地学教室で開かれた、日本地理学会での講演「地名の話」（「地名と地理」と改題されて『地理学評論』に、その後『地名の研究』に収録。『柳田国男全集』第八巻）にあります。興味深いことに、柳田はここで「文化人類学」と言い、その分類を「甲 眼を働かす有形文化誌」「乙 耳を働かす口承文芸」「丙 同郷人の親しみに基づき直接に会得」するものと、三分類の原形を示しているのです。地名についても、はっきりと「乙」のなかの小分類「チ 命名法新

語造成法」に位置づけています。明治四四年に「地名は土地に名づくる文化芸術」と位置づけた延長にあるわけです。この地理学徒向けの講演とほぼ同じ時期の昭和六年八月に、神宮皇学館で開かれた「郷土史の研究法」で配られた附録「民俗資料分類法」と比べてみたいと思います。この講演を契機に、池上隆祐や後藤興善らによる柳田を囲む勉強会が始まったことを考えると、民俗学徒向けの初発の分類と言つてよいものです。地名は当然「二部 口碑（言語芸術）」に位置づけられ、その小分類「一 新語作成」のなかの大きな位置を示していたはずなのですが、地理学徒向けに比べて、地名研究への誘導はありません。一二月の講演を聞いていた佐々木彦一郎（当時助手）や山口貞夫（当時学生）ら地理学徒たちが、柳田のもとで山村や離島の採集調査に入っていくことや、柳田の『地名の研究』は山口の手によるものであったことなどのつながりも考えてみたいところです。

このあと続く、佐々木や山口、民俗学徒のなかでも語彙に注目していた倉田一郎や守随一の相次ぐ若い死は、柳田民俗学にとつても、柳田個人にとつても相当な痛手であったこともここで指摘しておきたいと思います。

三、「矢立峠」から「矢立の木」「ゴンゲサマ」

から「耳取」「耳塚」の地名解

峠の地名に興味をもった柳田が、羽州街道の矢立峠に眼をつけたのは、当然の流れでした。菅江

真澄も通った歴史的な峠は、羽後と陸奥の境界の峠で「境の山に矢立」といふ地名が多いのは注意する必要がある」と言い、次に甲州の国中と郡内を隔絶する笹子峠の矢立杉に論究します。この明治四四年の指摘から、昭和五年『旅と伝説』に「矢立の木」を発表するまで、恐山や高野山、飯田風越山、大鹿村、九州の日向街道などの「矢立」地名を追い続けていきます。とくに風越山の矢立木は、愛着があつたのでしよう。『信州随筆』にも収録するほどの論考となりました。今回、櫻井弘人さんから、権現山と呼ばれていた風越山の矢立木を境として、上が神の領域、下が仏の領域と読み取れることのご教示を受けました。境界は、横(水平)だけでなく、縦(垂直)にも存するのだと気づかされたのです。

この「矢立」地名考説には、柳田の一途なまでの信念が貫かれています。「耳取」地名には、難題が立ちふさがることになります。『遠野物語』一〇話は、ゴンゲサマが隣村との境で争って、片耳を失うという話です。境界地名に興味をもつていた柳田が、ここでも強い信念のもと、信仰の原初のかたちを追い求めようとしたのでしよう。当然のように「耳取権現」から「耳取峠」「耳塚」に至る「ミミ」地名を追い続けることとなります。

京都市方広寺門前にある耳塚をめぐって、南方熊楠との間で意見が別れ、柳田のいうような境界の神を祀る場ではなく、豊臣時代の朝鮮戦役で、戦

勝の証として持ち帰った鼻を、秀吉が供養して葬った塚であることが文書から明らかになったのです。南方は、柳田との書簡のやりとりを資料提供者の寺石正路に伝えると、寺石は南方に「耳塚考の一件、柳田君全敗」と返信します。柳田・南方との往復書簡での山人論争に眼が向きがちですが、私はこの耳塚論争にもつと光が当たるべきと思つていきます。南方の「耳塚論」が『郷土研究』休刊のために、発表できなかったことも、大きなできごとであつたと思われまふ。(小島瓔禮「耳を切り、鼻を削ぎ、髪を切り」『民俗学研究所紀要』第三九集、成城大学民俗学研究所、参照)

柳田が、昭和二年に発表した「鹿の耳」というエッセイは、こうした紆余曲折の地名解への柳田の決着の表明であり「無益の物好きでもない」という締め言葉は、南方への返信ではないのかと私は思っています。

#### 四、松永美吉『民俗地名語彙辞典』から

この「耳取」地名解については、残念ながら『綜合民俗語彙』のなかでは「耳取峠」の風が厳しくて寒く耳が取られるほどということからついたとの説明のみに終わっています。私たちは、柳田の境界や生け贄の信仰の原初をみようとする仮説と、南方の言う歴史上の事実としての耳塚の両面を共通認識として、ここから始めなくてはなりません。谷川健一も「耳取」地名の謎は地名の面白さを教えてくれると何度も言っています。

松永美吉の『民俗地名語彙辞典』(日本地名研究所編、ちくま学芸文庫)の「ミミトリザカ」は、今までの地名解を紹介した上で「ミミは人体語の耳の意から物の端、隅の地をいい、ミミトリは下部を切り取られた台地などをいう」と地形地名にまで言及しています。「読む事典」としてお薦めしています。「一家に一冊」必備の書で、これも地名研究の裾野拡大に一役かつていると自負しているところです。

#### 五、まとめ

伊那谷地名研究会をはじめ全国の研究会も、私たち日本地名研究所も、高齢化や資金不足といった同じような壁を前に右往左往していますが、そうしている間に私たちの周りの愛すべき小字や通称地名が消えていってしまっています。柳田は、晩年個人の力でせいぜい百くらいしか考証できなかったと述べてますが、私たちには組織の力があります。伊那市の取り組みをお手本として着手しましょう。

また、地域、世代、異なる問題意識の交流の場としての日本地名研究所の会員となり『地名と風土』を今後とも支えていただきたいと思います。そして私の拙い話を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

追記 会のあと、橋都正さんから大鹿村の矢立木、

高橋寛治さんから高野山の矢立杉の写真  
をいただきました。多謝。